

## 対談

## 「ボランティア・市民活動が生み出す社会的効果・価値をとらえなおす」意義とは —「提言」づくりを通して

(6月25日 「広がれボランティアの輪」連絡会議シンポジウム「対談」より)



「広がれボランティアの輪」  
連絡会議会長  
やまざき みきこ  
山崎 美貴子 さん

&lt;聞き手&gt;

社会福祉法人 中央共同募金会  
企画広報部副部長  
あべ よういちろう  
阿部 陽一郎 さん

## 「提言」テーマと検討方法の設定の経緯について

**阿部** 「広がれボランティアの輪」連絡会議では、平成6(1994)年以来、時代の状況を踏まえながら、これまでに13の「提言」を発表してまいりました。そこで、現在検討中の平成21(2009)年度の「提言」について、山崎美貴子会長からお話を伺いたいと思います。まずは、なぜ、「ボランティア・市民活動が生み出す社会的効果・価値」に着目したのか、その経緯からお聞かせください。

**山崎** 「提言」は、「広がれボランティアの輪」連絡会議を構成するボランティア・市民活動推進団体の多様なメンバーで議論してつくっています。今回の「提言」のテーマを検討するなかで、「私たちは、いろいろな活動をやってきたけれども、これでよかったのか」とか、「活動の評価を十分にできているか」とか、「やってきたことを、誰もが了解できるかたちで伝えていないのではないか」など、いろいろな問題意識が出てきました。自分たちがこうしたいと思ってやっていることの価値は、自分たち自身よく理解できていると言いきれないし、社会的に認識されていない部分もあるかもしれない。このズレに着目して、それをはっきりさせる方法はないかという話になりました。

議論を重ねていくうちに、それを検証するには活動をしている方から学ぶしかない、ということで、8つのボランティア・市民活動団体にヒアリングをお願いすることにしました。

そして、それぞれの団体の活動のなかから、代表的なエピソードを聞き取り、活動の受益者や関係者の変化に着目し、可視化・指標化の検討を進めました。

## 受益者や関係者の「プラスの変化」に着目



阿部陽一郎さん

**阿部** いま「指標化」というお話が出ましたが、そこに至るまでの具体的なプロセスについて、お聞かせください。

**山崎** 私たちはこの試みを始めるにあたって、活動を通して現れた、受益者や関係者の「プラスの変化(良い変化・効果)」に着目しました。「プラスの変化」は、個々の活動事例のなかで、個別的な変化として現れますが、そこから、社会的に意義があると考えられる「共通の・普遍的な変化」を抽出することで、効果・価値の「指標」を特定できるのではないかと考えたのです。

そして、私たちは、ヒアリングの「記録」を

もとに、「受益者・関係者」として、次の5者を想定しました。

まず第1は、「活動の受け手(受益者)の変化」です。困難を克服したり、仲間や希望、生き甲斐などを見出すといったプラスの変化が見られます。2番目が「地域社会(住民や地域の諸団体)の変化」です。「記録」のなかには、家族や地域などさまざまな「つながり」から排除されていた人たちが、少しずつ地域につながっていく話が出てきます。

3番目が、「活動の担い手(ボランティア、NPOスタッフ等)の変化」です。「担い手」の成長や変化は、「受け手」をより良いかたちで支援していくことにもつながります。また、地域社会全体にとっても、地域社会の積極的な支え手としての力を得るというプラスの効果を生み出していくことになります。

4番目は、「活動組織(担い手の所属グループ、NPO)の変化」がどう起こっていくのか。そして5番目は、「行政(行政機関、公的制度・施策)の変化」です。それまでは非常に壁が厚かった「行政」が、次第に活動のパートナーに変わっていくプロセスが「記録」のなかに出てきます。

## 「変化」をもたらす6つの「要素」

**山崎** 実践のヒアリングを詳細な「記録」にして、それを読み込んで分析する作業を丹念に行い、指標とエピソードを一覧にした表をつくりました。そのなかで、「変化」をもたらす6つの「要素」を整理していきました。

その第1は、「対等な市民としての相補的な関係」です。上下の関係とか、誰かが何かをしてあげるのではなく、互いに、相手をかけがいのない人格として受け止めるということです。

そのことを通して、相互の変化が起こってくることを実感するエピソードが多くありました。

第2が、「ニーズ本位のかかわり」です。地域のなかでは、制度の狭間に落ちてしまうような、言葉にしにくい悩みや困りごとが語られます。「担い手」が「受け手」と目線を同じにししながら、ありのままの「語り」を支援し、自らが次のステップに踏み出すきっかけにしていくような「かかわり」がもつ力、というものがあるのだということを理解できました。大切なのはパートナーシップであり、そこからボランティア・市民活動のもっている固有の役割や価値というものが生まれてくることを実感しました。



山崎美貴子さん

第3が「場の力」です。自由で開放的な「場」のもつ力が、固有の価値を生み出すということです。地域の多様な住民が気軽に集ったり、交流するための「場づくり」が大切であることがよく分かりました。

第4は「時間の力」です。私たちは時々、効率性というものに走ってしまいがちですが、効率性とは反対に、お互いの関係性を温め合う「時間の力」の重要性に気がつきました。「記録」のなかでは、互いの関係性を十分に温め合うための、息の長い関係づくりの活動が、信頼関係を生み、育んでいく様子が語られています。エピソードでは、自分が次のステップに歩み出すときの力が、時間を共に過ごすかわりのなかで生まれてくる様子も見られ、いろいろな人びとと一緒に関係を温め合う時間というのは、活動の重要な要素なのだということが分かりました。

第5は、「代弁者・フォロワー」としてのかかわり方の力です。「代弁」と「受け止め」を通して活動をつくり上げ、定着させる力です。エピソードでは、地域住民や他の活動団体とホームレスの方々と同じ生活者、市民として意識的に出会う場をつくったり、ホームレスの身の上を説明したりする様子が語られています。地域の課題として位置づけ、代弁しながら、どうすれば地域社会のなかで、住民と当事者が同じ生活者としての感覚で、お互いが安心して向き合えるのか、自らの実践課題として前向きにとらえていることが印象的でした。

そして第6が、「運動性」の力です。これは、先に述べた第1から第5までの力を発揮していくために、組織としての「開放性」「柔軟性」「共感力」などを常に保持していくことを指しています。エピソードでも、常にニーズにあわせながらの運動性、ボランティアな生活者の感覚が失われたとき「単なる事業体になってしまう」危険性が語られています。

## 今回の「提言」を広げ、さらに発展させるために

**阿部** 今回の「提言」の重要な骨子となっている、受益者や関係者など5者の「プラスの変化」の視点と、「変化」をもたらす6つの「要素」について、お話をいただきましたが、これだけで終わらせるのでは、今回の「提言」は完成しないということですが、そのあたりのお話をいただけますか。

**山崎** 私たちは、これをさらに深めたいと思っています。そのために、できればボランティア・市民活動団体が、自らの活動を「記録」して、「自己診断ツール」に落とし込んでいただきたい。ボランティア活動の成果・価値を可視化することで、読み合わせをして、拾い出して、グループの皆さんで討議して、活動の振り返りをして、自己満足に終わらないようにしていけたらと思っています。

現在は、中間まとめの段階ですが、こうした作業を通して、ボランティア・市民活動の効果や価値を共有したいと願っています。

**阿部** 今回の「提言」を含め、これまでの「提言」のベースになっている考え方というのは、地域・コミュニティにおける「市民」としての相互の「主体形成」ということだと思います。皆さんにもぜひ、ご自分のグループ、あるいは他のグループへの聞き取りをしていただいて、その積み重ねから、いわゆる「ソーシャル・マーケット」の可視化というものにつなげていきたいと考えています。

※上記「提言」は、平成21年8月中旬に完成・公表され、9月26～27日の「第18回全国ボランティアフェスティバルえひめ」の2日目に関連分科会が予定されています。

# シンポジウム

## 実践から見る「ボランティア・市民活動が生み出す社会的効果・価値」

### シンポジスト

NPO法人  
「アジア・フィルム・ネットワーク」理事・事務局長

いずみたに のぼる  
**泉谷 昇** さん

高校卒業後に渡米、映画製作などを学び帰国。愛媛と東京にてインターネット事業のコンサルタント業務を経て、平成14(2002)年、愛媛県内初のフィルム・コミッション「NPO法人アジア・フィルム・ネットワーク」を設立。映画・映像作品の製作支援を通じ、地域の魅力を再発見・再評価できる地域づくりを実践中。

「スープの会」  
世話人

こう こうじ  
**後藤 浩二** さん

平成6(1994)年よりボランティアグループ「スープの会」に参加し、東京・新宿でホームレスと呼ばれる人びとへの路上訪問活動を始める。精神科クリニックでのソーシャルワーカーを経て、平成12(2000)年に「スープの会」の取り組みの一環として「地域生活支援ホーム」(宿泊提供事業)を開始。NPOの専従職員となる。

ボランティアグループ  
「すずの会」代表

すずき けいこ  
**鈴木 恵子** さん

10年間の親の介護をきっかけに、平成7(1995)年、PTA仲間5人とともにボランティアグループ「すずの会」を設立。平成13(2001)年、川崎市の介護予防事業「わたしの町のすこやか活動」に取り組む地域ネットワーク「野川セブン」を結成。利用者の視点に立った介護情報誌『タッチ』を発行し、平成19(2007)年には5冊目を刊行した。

### コーディネーター

東京ボランティア・市民活動センター  
アドバイザー

あんどう ゆうた  
**安藤 雄太** さん

日本大学法学部卒業後、東京都社会福祉協議会に就職。東京ボランティア・市民活動センターにおいて、ボランティア・NPOの支援を進める。同センター副所長を経て現職。そのほか、立教大学大学院非常勤講師、日本福祉教育・ボランティア学習学会理事、社会福祉法人サンフレンズ理事等。

次ページより内容を紹介します。

**安藤** 今回の「提言」のテーマとなっている、「ボランティア・市民活動が生み出す社会的効果・価値」について、実際に活動を推進している人たちのお話から、それぞれの活動がもたらした「変化」などを通して浮き彫りにしていきたいと思います。

### 経験・知識の蓄積による「まちづくり」

**泉谷** 私たち「アジア・フィルム・ネットワーク」は、「フィルム・コミッション」という活動を軸に展開している団体です。具体的には、映画やテレビドラマ、コマーシャルといった映像を製作する会社が、愛媛県で撮影を行う場合に、新しい愛媛の魅力というものを製作側に提案して、彼らが愛媛で撮影をすることを支援しています。また、一方では、撮影支援を通じて再発見した地域の魅力を県民や関係者の方たちに伝えています。



泉谷昇さん

また、いろいろな撮影支援を繰り返していると、多くの知識や経験が蓄積されますので、その知識・経験を有効に使って「まちづくり」に取り組んでいます。そのなかの一つが、「こども映画塾」で、地域の将来を担う子どもたちの豊かな感性や、表現力、創造力を養うことを目的としています。小学生高学年くらいの子供たちが集まって、チームで地域を題材とした物語を考え、脚本や撮影、演出、ときには出演まで子どもたちがするというものです。自分たちの地域にはどういふものがあるのか、という「気づき」を提供しています。

活動を支えるメンバーは現在25名で、社会人、学生、インターンシップ生、企業などの個性豊かなメンバーで構成されています。愛媛を面白くする企画を立てることによって、人が人を呼んでいるという「変化」が起きています。

そして、私たちのような活動を地道に繰り返すことによって、愛媛県庁から「NPOさんも意外とやるね」と評価をいただいて、次に続く人たちや活動に対しても、行政の意識や理解が変わってきたと感じています。

私たちは週に1回、必ず全員で活動の振り返りをしています。頭では分かっているつもりでも、実際の活動現場に行くと、自分たちの「やりたいこと（目標）」と社会のニーズが少しずつズレていくことがあります。そこで、定款を見直したり、自分たちの強みはどこで、弱みはどこかという検討をしたり、社会のニーズと自分たちの目標を擦り合わせたり、第三者からみても分かりやすい取り組みをしてきました。そういう意味では、活動の可視化ということはある程度できていると思います。

**安藤** 映像製作を通しながら、あるいは映像化することによって、「地域の文化」というところに切り込んでいるわけですが、活動のなかで、明らかに「地域が変わった」と思われるエピソードはありますか。

**泉谷** 例として、道後の旧歓楽街での活動があります。愛媛県の真ん中の道後温泉から歩いて5分のところにある、昭和の雰囲気が高く残った場所なのですが、「遊郭のある色街」というかつての良くないイメージから、地元市民からは忌避されたような状態になっています。

なぜ、この地域がこのような状態になったのかを知りたいと思い、そこで働いている人たちや、お店を運営されている人、利用者の方々など、50人以上からヒアリングしました。私たちは映像をつくるための活動が主だったのですが、地域

の問題としてやらざるを得ないと考え、何度も門前で追い返されたり、「話すことはない、来るな」と言われても、私を含めたメンバー全員で、何度も足しげく通いました。そのうちに、町内会長から話を聞けたり、お寺の住職さんにご協力をいただけるようになりました。最終的には行政を巻き込んで、まちの再生のためのシンポジウムを行いました。この地域を「これからどうしていくか」ということを問いかけながら、いまは、そのスタート地点に立とうとしています。

### 生活者の感性を大切に「場づくり」

**後藤** 私たち「スープの会」は、東京・新宿でホームレス問題や貧困問題に対する活動を中心にを行っています。ホームレス状態に至るまでの過程に存在する個別・具体的な生活課題には、さまざま異なる背景があります。単に「屋根のある、なし」ということではなく、その人が必要とされる社会関係から切れてしまった状態、そうした社会的孤立、社会関係における「貧困」が存在しているのです。



後藤浩二さん

私たちは、何か目標があって活動を始めたわけではなくて、「ホームレス」という言葉でくられる人たちの「顔」というものが、なかなか見えなかったため、私たち自身がまちに出て、ホームレス状態にある人と言葉を交わしていくなかで、そこで何が起きているのかを知りたいと思いました。そういう想いから、「こんばんは」とドアをノックする感覚で、一人ひとりを訪問する活動を始めました。

そのときに意外だったのは、最初は口もきいてもらえないのでないかと思っていましたが、私たちが何度か足を運ぶと、次第に郷里の話や家族の話をしてくれるようになりました。それを聞いたからといって、私たちには何もできないのですが、語ってくれるなかで、その方の表情が変わってくるのです。人とふれあうことによる当事者自身の「変化」というものを実感しました。初めてその人の生活にふれた感覚というものが、とても新鮮に残っています。

そのような経緯もあり、地域生活支援事業として居所提供と同時に、地域のことをもっとよく知りたいということで、新宿区の社協に出入りするようになりました。そこで、精神障害者の方の居場所づくりを考えている団体、あるいは一人暮らしの高齢者の見守り訪問をしている団体の方と出会って、いまではそうした団体同士が交流をもつ機会を共有しています。そうした交流のなかでお互いに話すことは、ホームレスや精神障害者、高齢者といった異なるテーマのようでありながら、地域のなかの「場づくり」という意味では、同じことをやっているのではないかと、私たち自身が「場づくり」の担い手となることでコミュニティの再構築につなげられるのではないかと気づきました。

私たち自身の取り組みは、「路上」から、その先にある生活のための「場づくり」というテーマに変わっていき、それにかかわるボランティア・NPO、あるいは行政とのつながりも生まれてくるようになりました。

**安藤** 「スープの会」では、「ホームレス問題」から入って、生活のための「場づくり」をどうするか、まちのあり方をどうするかという、活動の広がりをもっていますし、いろいろなところとつながって、行政を動かしてきているというのが大きな特徴だと思います。そうしたなかでの地域とのかかわり

## ボランティア・市民活動が生み出す社会的効果・価値をとらえなおす

—「広がれボランティアの輪」連絡会議シンポジウムより

については、現在どのような状況ですか。

**後藤** 私自身が2児の父として暮らしている地域に、夜間になると200人もの人がホームレス状態で集まる大きな公園があります。私たちが「路上」の訪問活動を通して、ホームレス状態の人と向き合うなかで、「これは地域の問題だ」と思い、それを地域住民との交流の場などで、「私たちはこういう活動をしています」と一方的な思いで言ったところで、最初はコテンパンにたたかれます。私たちよりはるかに長く、その地域で暮らし、ホームレス状態の人が酒を飲んで、ときには大声を出している光景を目の当たりにする住民の方々の思いは、あながち偏見や差別という言葉ではくくれません。だからこそ、ホームレスの人たちが、なぜこういう状態になったのかを知ってほしいと、地域との対話を始めました。現在は、子どもの安全な遊び場づくりを考えるグループとも話し合うなど、地域の一員として、公共空間づくりの担い手に加えてもらえたような気がしています。



### 地域を支える住民ネットワークの力

**鈴木** 私たち「すずの会」の活動の場は、川崎市宮前区野川町という小さな地域です。私自身の介護体験を活かし、地域のなかでの助け合い、支え合い活動を推進しようと、PTAの仲間たち5人と立ち上げました。

「ちょっと困ったときに、鈴を鳴らしてください」と、悩みや困り事の解決を活動の基本として、当事者の立場、生活者の視点を忘れずに、「とにかく、やってみましょう」という姿勢を大切にしています。

鈴木恵子さん

もう一つの大きな柱は、「すずの会」の活動だけでは限界があるので、地域のなかの同じようなグループや、社協、民生委員、行政などのネットワークをつくりながら、活動を発展させていくことをめざしています。

定期的に行っている活動は、ミニデイサービス「リングリングクラブ」(月2回)です。若年認知症の妻の手を引いた方の、「私と妻の参加できる場所がありますか」という一言が、この活動につながってきました。

ミニデイサービスだけでは、地域全体の活動には広がらないということで、ご近所サークル「ダイヤモンドクラブ」を行っています。地域のなかには、拠点となる場所がないために、有志による自宅開放というかたちをとっています。自宅開放をしていただくにしても、「気になる人」を真ん中にしたサークルをつくらうということで、そこでは、人と人とがゆるやかにつながって、生活の悩みも気楽に出せる場にしています。

地元の方たちの「地縁」も大切です。男性を中心に30人くらいの「ダイヤモンドクラブ」では、年に2回、ネットワークを

活かした災害時の訓練を行っています。大きな庭をもっている地元の人が声をかけ、庭先でご飯がどのくらい炊けるかという訓練を、一杯飲みながら行っています。

「ダイヤモンドクラブ」はおよそ30カ所で、いまでも増えています。元気な方たちが集える場として体操をしているグループが6カ所。この体操グループの参加者は、地域内をよく歩いているので、有効な情報源となっています。ミニデイをやっているところが3カ所。そして、「世話焼きさん」と呼んでいる、活動を支えてくれる中心的な人たちが10カ所にいます。この「世話焼きさん」たちが点在していなければ、地域の課題を発見することは無理ではないかと思っています。

**安藤** 「すずの会」の活動には「世話焼きさん」という存在があり、その人たちを中心に地域が動いているような気がしますが、その「世話焼きさん」というボランティアは、どういう人たちで、どんなきっかけで生まれたのですか。

**鈴木** 黙ってられないおばちゃんたちです(笑)。自分たちで「気づき」がもてる人で、その人たちの「ダイヤモンドクラブ」に参加している人が、「うちでもやりたい」と言って、アメンバー状に広がっています。その中心が、「世話焼きさん」です。

また、例えば、「今日ちょっと具合が悪くて、買い物にも行けないのよ」とつぶやいたことを、隣のおばちゃんが聞きつけて、助けてくれます。その恩恵を受けた人が元気になったら、「誰かが何かあったときには、力になりたい」といった関係をご近所で積み重ねていただいで、制度に頼らない助け合いの「絆」も広がっています。

**安藤** 3人のシンポジストの活動は、それぞれ異なる内容や地域のものですが、さまざまな共通点があったと思います。最初は地域で拒絶されたり、違った意見があるなかで、そこを「溶かし合って」、お互いに対等な関係で理解し合っていく、それに時間をかけていくというのが、重要なキーワードだと思います。おそらく、行政との関係でいうと、必ず効率性や効果を問われるわけですが、生活の場での活動には、ゆっくりと時間をかけていくなかで生まれる信頼が軸にあり、それがあってはじめていけるなかなかたちでつながっていき、変化を及ぼし合っています。だからこそ、地域の人たちによるボランティア活動が数字では計りきれない大きな意味、価値を持っているのではないかと感じました。

これからは、このように活動の社会的価値を少しずつ表に出していき、共感を得ていくことが、私たちがボランティア・市民活動を進め、広げていくうえでの大きな役割としてあるのではないかと思います。



安藤雄太さん

